

紀にする

奥村知世

息子さんが夢中な恐竜に取材した今月の一連である。ここで注目したのは「全員」。何人家族か読者は知らないわけだから、読者は自分の現在や過去、あるいは友人の家族や小説のなかの家族などを思いつつ、「全員」の数を想像する。現代短歌では具体的な数詞が採用されることが多いが、ここは「全員」と含みをもたせて成功した、と見ていいと思う。

耳ひたと添わせいる背を撫でやればうさぎはあごを床に下ろせり  
谷ちえみ

飼っている兎に取材した今月の一連。表現が具体的なので、兎の生態を知らない読者にも想像できる。私のイメージするところが当たっているかどうか心許ないが、「うさぎはあごを床に下ろせり」も一応、わたしなりの想像はできる。

残照と籠の灯とに挟まるる比叡が黒く横たはりけり  
佐藤博之

日没前の、そう、数分間だけの限定的な光景だろう。風景は空間的なものであり、静止しているのと思いがちだが、こうした歌を見ると、風景は空間的存在でありつつ時間的存在でもあることを痛感させられる。

雨だれの音を聞く事なくなり降りある雨に気づかずをり  
古賀公子

マンションに移り住んで、雨の日には、雨の気配を感じた庭付きの家を思い出すという。今月の八首のどくに前四首に感心した。近年、日本の気象が荒っぽくなって、

しとしとと降る雨など昔話になろうとしている昨今、ひさびさに昔ながら日本の雨を思い出させてくれたような気がする。

丸ごとのミカンの断面のぞかせてフルーツサンドの厚みたっぷり  
鈴木陽美

一個そのままを横に切ったミカンでは厚すぎるので、それを半分にしたのが横に並んでいるのだろう、そう理解して読んだ。ミカンとミカンの隙間はたぶんたっぷりのクリームでうめられているのだろうから、厚みたっぷりボリュームたっぷりのフルーツサンドだ。

中川を縦に引き裂き鋭角の水脈ひらき行くシングルスカル  
十亀弘史

「縦に引き裂き」がうまい。ボート競技場だから、とうぜん川を縦部分にとってコースが作つてあるわけだが、あえて「縦」を入れて「縦に引き裂き」としたこと、表現に迫力が出たのだと思う。「……縦に引き裂き鋭角の水脈ひらき行く……」、スピード感があつて、かつ明快なイメージを思い浮かべることができる。「シングルスカル」は一人漕ぎのボート。

ある筈のないものがある水色のなかなか暮れない夏  
至の夕暮  
斎藤佐知子

「ある筈のないもの」とは、「水色」だろうと読んだ。夏至だからなかなか日が暮れないのは当然だけれども、それにしても不自然なくらい日暮れが遅く、ある筈がない水色の空がまだ見えている、というのだ。近代以降、夏至の歌はたくさん作られてきたことが、思い出される。